

# 生徒のキャリア形成に寄与するリフレクションガイドの開発

今井 彩 (秋田大学教育文化学部附属特別支援学校)

前原和明 (秋田大学大学院)

## 1 目的

### リフレクションガイド作成のための ガイドライン項目の検討

個々のキャリア形成のスピードや職業意識の持ち方に合わせて現場実習のフィードバックを行い、生徒のキャリア形成を支援していくことが大切だとされているが(森脇, 2012)、それを課題に感じている教員が多い。

生徒の就労支援を担う教員支援のためのリフレクションガイドを開発を目的に、専門家の合意形成を図りながらガイドライン項目を検討する。

## 2 方法

### デルファイ法を用いて 調査対象者の意見集約を図り、 ガイドライン項目の 内容的妥当性を検証



#### ①調査時期

・2023年6月上旬～8月上旬

#### ②調査対象者

・秋田県内全ての知的障害を主とする特別支援学校12校に勤務する高等部主事もしくは進路指導主事

#### ③調査方法

・デルファイ法  
・郵送による質問紙調査を2回実施  
・調査対象者の回答期間20日間、データ分析に10日間を割当て  
・1回目の調査結果を2回目の調査項目の修正に反映

#### ④調査項目の作成

・生徒のキャリア発達を促す現場実習のフィードバック方法(今井・前原, 2022)と現場実習評価表がもつアセスメント機能(今井・前原, 2023)を参考に、現場実習の振り返り場面における教員のノウハウについて、現場実習評価表の活用、フィードバックの方法、教師の働き掛けに関する34の項目を作成

#### ⑤分析方法

・Jane & Mikeを参考に、IQRが1.5以下かつ同意率が80%以上の場合に合意基準とした

#### ⑥研究倫理

・質問紙調査は、研究の目的と内容等を紙面上で説明し、調査協力の同意は質問紙への回答をもって得た。

## 3 結果と考察

### 2回の調査を通して全ての項目で合意基準を達成(回収率100%)

・秋田県内の特別支援学校12校に勤務する高等部主事2名、進路指導主事10名から有効回答を得た。調査対象者の特別支援学校における勤務年数は平均21.4年、高等部所属経験年数は平均16.3年だった。

・1回目の調査では、現場実習評価表の活用に関する項目9『評価結果を家庭に伝え、進路の選択肢を絞る』を除く全ての項目が合意基準を満たした。項目9はIQRが2のため、合意基準を満たさなかった。修正を求めるコメントから、評価結果の活用の仕方や家庭への伝え方に関して指摘があったことから、『実習先の評価について家庭に伝え、進路の選択肢を絞る』と修正した。なお、この項目9の修正に合わせて『評価結果を家庭に伝え、…』となっていた項目5～8の表現を全て『実習先の評価について家庭に伝え、…』に修正した。その結果、2回目の調査では項目9のIQRが0.5となり、全ての項目で合意基準を満たした。

表 デルファイ法を用いた1回目と2回目の調査結果

調査項目(修正後)	1回目			2回目		
	中央値	IQR	同意率	中央値	IQR	同意率
1 実習先の評価を活用し、生徒が現場実習での課題に気付けるようにする。	5	1	100%	5	1	100%
2 実習先の評価を活用し、生徒が現場実習での成果に気付けるようにする。	5.5	1	100%	5.5	1	100%
3 実習先の評価を活用し、生徒が自分の苦手なことに気付けるようにする。	5	1	100%	5	0.25	100%
4 実習先の評価を活用し、生徒が自分の得意なことに気付けるようにする。	5	1	100%	5	1	100%
5 実習先の評価について家庭に伝え、進路選択の参考にしよう。	5	1	100%	5	0.25	100%
6 実習先の評価について家庭に伝え、進路決定の参考にしよう。	5	1.25	92%	5	0.25	100%
7 実習先の評価について家庭に伝え、生徒の現状を知ってもらう。	5	0.25	100%	5	1	100%
8 実習先の評価について家庭に伝え、今後の指導・支援について協力を仰ぐ。	5	1	92%	5	1	100%
9 実習先の評価について家庭に伝え、進路の選択肢を絞る。	5	2	92%	5	0.5	100%
10 実習先の評価を参考にし、個別の支援計画の見直しを図ったり個別の移行支援計画の作成に役立てたりする。	4.5	1	83%	5	1.25	83%
11 評価結果を参考に、生徒の現場実習の課題を教育活動で改善する。	5	1	100%	5	0.25	100%
12 評価結果を参考に、生徒の現場実習の成果を教育活動で生かす。	5.5	1	100%	5.5	1	100%
13 評価結果を今後の指導・支援の在り方の参考にしよう。	5	1	100%	5	1	100%
14 評価結果の情報を共有し、学部もしくは学年・学級全体の指導の在り方を見直す。	5	1	83%	5	1.25	92%
15 実習先の評価を参考に、作業内容が生徒に合っていたかどうか検討する。	5	1	92%	5	1.25	92%
16 実習先の評価を参考に、作業環境が生徒に合っていたかどうかを検討する。	5	1.25	83%	5	1.25	92%
17 評価結果から、生徒の現状について教員間で情報を共有する。	5.5	1	100%	5	1	100%
18 評価結果から、生徒に必要な支援について検討する。	5	1	100%	5	1	100%
19 事前に現場実習先と評価基準の認識を一致させておく。	5	1	92%	5	1	100%
20 事前に現場実習先に重要視している評価項目(生徒の目標)を伝えておく。	5	0.5	83%	5	1	92%
21 生徒の自己理解の発達段階に応じて、生徒が理想と現実について考えられるよう現場実習先からの評価の伝え方を工夫しながら個別に面談を行う。	6	1	100%	5	1	100%
22 保護者と現状を共有し、指導や支援の方向性について共に考える。	5	1	100%	5	1	100%
23 生徒が自分の現状を認識できるよう、友達と成果や課題を共有する場を設ける。	5	1	100%	5	0.25	100%
24 適切な目標設定への援助に向けて生徒理解を深められるよう、周囲の教員と生徒の実態把握に努めたり、適切なアセスメントを実施したりする。	5.5	1	100%	5.5	1	100%
25 生徒が「課題」と認識した事柄について「課題となる理由」を一緒に考え、生徒が自分への理解を深めながら達成可能な目標を設定できるよう導く。	5.5	1	100%	6	1	100%
26 生徒の課題への意識を高め、目標の達成状況を評価する。	5	1	100%	5	1	100%
27 生徒の課題解決に向けた行動が、実際の社会生活をイメージした行動につながるよう意味付けをする。	5	1	100%	5	1	100%
28 生徒が自分の成長を客観的に認識できるよう、学習の中で記録や評価ツールを活用し、自分の行動を振り返ることができる場を設ける。	5	1	100%	5	1	100%
29 学級や学習グループの中で、生徒が互いの成長について語ったりする場を設ける。	5	1	100%	5	1	100%
30 日々の学習における生徒の様子から自分の指導を省察するため、他教員と情報共有を図ったり意見交換を行ったりする。	5.5	1	100%	5.5	1	100%
31 「何に気付いてほしいか」「なぜ気付いてほしいか」「どのような方法であれば気付くことができるか」といった明確なねらいをもって働き掛ける。	6	1	100%	6	1	100%
32 実習先からの評価は、生徒が自分の認識の違いに気付けるように活用するだけでなく、教員が自らの指導に生かして行くための標とする。	6	1	100%	5	1	100%
33 生徒の目標達成に向け、一貫した指導を行うことができるよう、生徒の課題や生徒の実態に応じた指導方法を教師間で共有する。	5	1	100%	5	1	100%
34 生徒の課題解決に向けた行動が、自ら成長するための自発的な行動となるよう、生徒が目標に向かって取り組む行動に対して意味付けを図る。	6	1	100%	5.5	1	100%

## 4 今後の展望

このガイドライン項目を使ったリフレクションガイドを教員に活用してもらい、勤務経験年数や高等部所属年数に関係なく、生徒に対して効果的に活用できるかを検証する。